広島大学高等教育研究開発センター

コリーグ

編集・発行　広島大学高等教育研究開発センター
〒739-8512　東広島市鏡山 1-2-2
TEL 082-424-6240　FAX 082-422-7104
URL: http://rihe.hiroshima-u.ac.jp

２０１５年５月

「コリーグ」48号　目次

巻頭言（１～３）戦略的研究プロジェクト（３～４）第四回日豪交流セミナーに関する報告（４～５）第42回研究員集会報告（５～６）外部評価について（６）高等教育公開セミナー報告（６～７）学生シンポジウム報告（７～８）2014年度の公開研究会（８）センター往来（９）新堀通也先生のご逝去を悼む（10～11）新任者・離任者・就職者から一言（12～16）院生だより（17）情報調査室だより（18）

巻　頭　言

センター試験との一年間

大塚　雄作
（独立行政法人大学入試センター試験・研究統括官）

大学入試センターに異動して，ほぼ一年が経つ。前任の京都大学高等教育研究開発推進センターは，「FD」の推進をミッションとしていたので，さすがにセンター試験という業務はかなり雰囲気も違って戸惑うことも少なくない一年であった。しかしまた，大学入試はまさに大学教育の入口のイベントでもあり，今まで関わってきた大学教育を別の視点から見直す機会にもなった。それと共に，センター試験というものに対する見方そのものも随分変わったように思う。

大学入試センターに関わっての私の役目は，主に試験問題の作成に関わる調整である。センター試験は，ほぼ2年かけて問題が作成されており，本試験の他に，追再試験があるので，ほぼ同等の2セットの試験を完成させる必要がある。この問題作成は，センター試験はあくまで大学の入試であるという第一義に立ち返って，全国の大学から教員が入試センターに集められて行われている。科目数は30科目前後となり，500人を超える作題委員で構成される第一委員会と呼ばれる部会において，問題の漏洩などを防ぐために家に持ち帰って作業ということはできないことから，入試センター内のセキュリティがしっかりとかけられた問題作成棟の中だけで，45日間ほどの問題作成作業が積み重ねられている。

問題作成に関わるのは，第一委員会だけではない。それぞれの科目に，作成された問題を点検する第二委員会と呼ばれる委員会がある。第二委員会は主として，第一委員会の OB から成り，OB 委員会とも呼ばれることがあるが，総勢200人程度の委員が，少なくとも3度は綿密な問題点検を行っている。その他に，さらに問題作成のベテランから成る第三委員会も設置されていて，科目間の問題のバッティングなどを含めて大所高所から点検を重ねているし，また，高校関係者，教育委員会関係者（点検協力者と呼ぶ）による高校教育の視点からのチェックなど，二重三重の点検体制がとられているというのは，入試センターの問題作成に関わって

No. 48

初めてわかったことであった。

今年の平成27年度センター試験は，学習指導要領の改訂の関係で，数学と理科に関しては，経過措置として，浪人生に関しては，旧課程の試験問題も作成され，それを受験することもできるとされた。そのために，「理科総合」などの新課程には含まれない科目も残されていて，例年に比べて部会の数も多くなり，それだけ，問題作成作業も大変であったし，また，点検の作業も大変であった。問題作成のみならず，実施の面でも，平成24年度試験の際には問題冊子の配布ミスというアクシデントも起こっていて，いろいろと混乱が起きることも心配されていた。そこで，センター試験実施時のシミュレーションも綿密に行って，経過措置による混乱が起きにくいような試験実施要項が固められ，それを，高校や大学に何度となく周知する機会をもち，高校，大学も含めて，大変な努力を積み重ねて本番を迎えているということを目の当たりにもした。

大学に在籍しているときは，センター試験の監督の役割も回ってきたが，本番に監督要領を見ながらやれば何とかなるだろうといった軽い気持で試験監督に臨んだことを思うと，本当に申し訳ない気持になるくらいに，センター試験は一つひとつが真剣かつ慎重なプロセスを経て実施されているということが身にしみて感じられた。幸い，今年のセンター試験は，経過措置という複雑な実施条件の下で，大きなトラブルもなく，無事に完了することができた。試験本番のときには，私自身は，入試センター内の実施本部に詰めていたが，全国の試験実施会場の大学からの連絡や情報を一つ漏らさず授受し，それを然るべきところに伝達して的確に処理していくセンター職員の動きは迫力さえ感じさせるものだった。

もう一つ迫力を感じさせるのは，そこにはいない50万人の受験生であった。50万という数の大きさを感じたのは，受験生から，問題に関する問い合わせが次々に寄せられてくることであった。概ね，受験生の側の問題の読み違えであったり勘違いであったりするのであるが，中には，専門家がプロの目であるからこそ見過ごしてしまうような観点からの質問も飛び出してくる。綿密な点検を経たセンター試験ではあるが，ご存じのように，今年は，そういった受験生からの指摘により，正解を加えなければならない問題などが出てしまったことは私の立場としては残念なことであったが，また同時に，そういうマスの力というものを直接感じる経験でもあった。ちなみに，500人規模の追再試では，受験生からの質問もほとんど皆無に等しい状況であり，その比較からしても50万という数字の圧力は想像をはるかに超えたものであった。

センター試験は，実施後，その問題が新聞にすぐに公表されることになるが，それは日本では当たり前になっているが，問題作成側からするとそれも点検評価の一つの大きな機会になっているということも経験した。すぐに，受験生自身をはじめとして，その保護者，高校・予備校・大学の教員などから，この問題はここがおかしいのではないかという問題照会が飛んでくるのである。問題作成の委員会は，こうした外からの目にも対応していく必要がある。センター試験は，高校の学習指導要領，教科書に準拠することを原則としているが，例えば，最先端の研究では例外が見つけられているといったレベルの問題照会なども出てきて，存外その対応も容易ではない。

このような大学の先生方の問題作成の奮闘ぶりを身近に経験して強く感じたことは，これは「FD」に他ならないということであった。FD なるものは前職の関係でかなり見聞きしてきたが，これほど真剣かつ充実した「FD」の場はなかったのではないかと思うほどである。第一委員会の問題作成では，まず，通常では大学教員はほとんど意識もしない高校の学習指導要領や教科書を精査するところから始まる。その内容に関して，大学での学びに必要な側面を切り出し，それを試験問題として表現するためにどうしたらよいか，委員同士の意見交換，教え合い学び合いといったやりとりがなされる。そして，第二委員会の点検では，「今年の問題にはアカデミックな匂いがしない」といったコメントが付いたり，あるいは，点検協力者からは「高校生には馴染みがない問題で差し替えてほしい」といった要望が来たり，積んでは崩し，崩しては積みといった，根気のいる，しかし，創造的な共同作業が行われている。問題作成は，まさに大学教員にとっての「相互研修型 FD」の場になっているのである。

こういう経験を踏まえて感じることは，単にセンター試験は大学入試のための試験というよりも，高大接続答申に盛り込まれている「高校教育，大学教育，大学入試の一体化」という理念を先取りして，

その機能果たすべく25年間にわたって積み重ねられ，今や日本の誇る一つの文化に醸成されてきているのではないかということである。それに引き替え，昨今の中教審答申などが今ひとつピンと来ないのは，日本の社会文化に適合する形で積み重ねられてきた大学教育文化のよいところをいたずらに捨て去り，決して先進しているとは言い切れない海外の教育施策を半ば強引に日本に当てはめようとしている点が目に付いてしまうからかもしれないと思う。グローバル化の波が押し寄せてきている昨今，そこに何か焦りを感じるのは私も例に漏れないのではあるが，焦って得られるもので持続的に有効なものは少ない。むしろ困るのは子どもたちである。高大接続答申が出されて，入試改革に向けての動きも急を告げており，大学入試センターもその流れを推進して行かざるを得ない立場にあるが，子どもたちの視点に立って何がよいことなのかをしっかりと見極めた上で，腰を据えて大学入試のあり方を捉え直していく必要があるだろう。そのための基盤を提供してくれるのは，何と言っても，高等教育に関わる多様な研究知見に他ならない。この時期にあって，遅いようではあっても，まずは，入試も含めて，高等教育に関する研究体制がさらに確固たるものになり充実していくことを望みたい。それがセンター試験に付き合って一年の今の偽らざる心境である。

戦略的研究プロジェクト

◆◇◆これからの研究活動について◆◇◆

藤村　正司
（高等教育研究開発センター教授）

平成26年度の「戦略プロジェクト」は，昨年度に引き続き，機能別分化（大学間ネットワーク）とグローバル化をテーマに取り上げました。成果は，『大学の機能別分化の現状と課題』（戦略的研究シリーズⅨ）として刊行予定ですが，比較班ではガバナンス改革の論点整理を受けて，大学の機能分化政策（英，マレーシア），統合政策（仏），パーフォマンス・ファンディング（米），グローバル人材育成（中国，韓国）の動向を検討しました。日本については，大学改革補助金制度の検討，学部長へのアンケート調査に基づくグローバル化への対応状況，新制以後の高等教育システムの変容と機能分化の過程，そして学位授与数のパネル分析などに取り組みました。

しばらくわが国の高等教育は，規制緩和の衝撃と18歳人口の急激な減少でシステムに障害が生じたために機能別分化の方向性が定まらなかったように思います。しかし，ここにきて政府によるカンフル剤の投入によってシステム強化がはかられていますので，機能別分化＝「強制的同型化」（DiMaggio & Powell: ASR, 1983）が強まりつつあるように見えます。

これからの戦略プロジェクト活動については，広島大学が「スーパーグローバル大学創成支援事業」（SGU）に採択されたこともあり，何らかの形でこれに資する形で進めていきたいと考えています。この支援事業は，わが国の高等教育人口の2割が関わる投資です。単に英語能力の育成だけでなく，グローバル化に対応するために大学のガバナンス改革，教育改革，国際化などを巻き込んだ大きな取り組みです。学内的には全学の水準化が進みますので，様々な問題や葛藤が生じると思われます。

留学生の受け入れについて言えば，彼らの生活時間の構造，生活費の収支構造の関連，授業料免除や奨学金の効果を検討する必要があります。他方，留学経験から学生は語学力以外にどのようなアウトカムを得たのか，卒業後に留学経験はどう生かされたのかは，大規模な卒業生調査が必要になると思います。

社会学者のマートンに，「予言の自己成就」という用語があります。大学ランキングに関わって言えば，世界大学ランキングが信用できないと分かっていても，それを正しいと信じて行動すれば，結果として成就するというものです。メディアの反響が大きかったSGU支援事業ですが，採択大学の掲げた目標は，果たして「予言の自己成就」になるか，それとも「予言の自己成就」の罠にはまってしまったのか。いずれにしても，政策の浸透には，行動分析による知見が不可欠だと考えます。

◆◇◆2014年度活動を振り返って◆◇◆

渡邉　　聡
（高等教育研究開発センター教授）

研究活動開始から七年目をむかえた「戦略的研究プロジェクト」は，わが国の行政改革と新発展を目指す「経済財政改革の基本方針2007」（2007年骨太の方針）を踏まえ，大学・大学院改革のための具体策に関する研究をおこなうことを目的に，文部科学省特別教育研究経費（戦略的研究推進経費）を受け，2008年度に開始された研究プロジェクトである。

昨年度から一般経費に組替えられ，第二期に入った戦略的研究プロジェクトの2014年度活動内容としては，まず2014年4月26日（土）に東京ガーデンパレスに於いて『グローバル競争時代における大学の多様化と機能別分化』と題する研究報告会を開催し，59名の外部参加者にお集まり頂いた。当日は，羽田貴史教授（東北大学高度教養教育・学生支援機構副機構長）を基調講演者としてお招きし，引き続き当センター教員･研究員計7名による研究報告がおこなわれた。イギリス，中国，フランスにおける海外事例を研究テーマとするセッションⅠおよび政策・定量分析を研究軸とするセッションⅡの二部構成により，各セッションでは以下の研究報告（発表者名）と参加者による活発な議論が展開された。

【基調講演】羽田　貴史（東北大学高度教養教育・学生支援機構副機構長）

【セッションⅠ】司会：渡邊あや（国立教育政策研究所高等教育研究部総括研究官）

- 「一元化後のイギリスの大学の多様化」（秦　由美子　教授）
- 「中国の高等教育の多様化について」（黄　福涛　教授）
- 「フランスにおける大学統合と連携」（大場　淳　准教授）

【セッションⅡ】司会：福留東土（東京大学教育学研究科大学経営・政策コース准教授）

- 「日本における大学の機能別分化政策の展開」（小入羽　秀敬　研究員）
- 「マス化の中で大学教育の機能分化は生じたか？」（島　一則　准教授）
- 「日本の学士課程におけるグローバル人材育成の実態と課題ー『大学におけるグローバル人材育成に関する研究』調査報告」（大膳　司　教授）
- 「大学への財源配分と機能別分化：理論的側面」（渡邊　聡　教授）

【コメント】山本　眞一（桜美林大学大学院大学アドミニストレーション研究科教授）

また過去6年間において8冊におよぶ「戦略的研究プロジェクトシリーズ」報告書Ⅰ～Ⅷを刊行してきたが，2014年度の研究成果については，昨年刊行された『大学の多様化と機能別分化』（戦略的研究プロジェクトシリーズⅧ）に引き続き，『大学の機能別分化の現状と課題』と題して，当シリーズⅨ刊目を年度内に刊行予定である。

第四回日豪交流セミナーに関する報告

黄　　福涛
（高等教育研究開発センター教授）

広島大学高等教育研究開発センターとオーストラリア・メルボルン大学高等教育研究センター共催，日本高等教育学会後援により，第四回交流セミナー『日豪の高等教育における国際化と大学教授職』が2014年4月7日から8日にかけて広島大学高等教育研究開発センターにおいて開催されました。

オーストラリア・メルボルン大学高等教育研究センター（CSHE）および広島大学高等教育研究開発センター（RIHE）からの参加者，当日のプログラムは以下の通りである。そのほか，イギリスの研究者，学外と広島大学関係者，当センターの教員と学生の約40名が参加しました。

【第1日目】
司　　会：島　一則（RIHE）
開会挨拶：リチャード・ジェームズ（メルボルン大学副学長 / 前高等教育研究センター長）
　　丸山　文裕（RIHE センター長）

オリエンテーション：黄　福涛（RIHE）
発 表 1「グローバル化の中の学術研究－他国を知る，それとも他国に知られるべき？－」
山本　眞一（桜美林大学・教授 / 前広島大学高等教育研究開発センター長）
発 表 2 「オーストラリアにおける大学教授職の将来像」ヘーミッシュ・コーツ（CSHE）
発 表 3 「わが国の大学リーダーによる国際化志向に関する認識分析」渡邉　聡･村澤　昌崇（RIHE）
発 表 4 「オーストラリアの高等教育における教育専門職化」リチャード・ジェームズ（CSHE）
発 表 5 「中国人留学生が日本留学を決める要因に関する研究 － Push-and-Pull モデルに基づいて－」
李　敏（信州大学高等教育研究センター・講師）
討　　論

【第2日目】
司　　会：山本　眞一（桜美林大学）
発 表 6 「日本の大学におけるグローバル人材育成 －その実態と成功要因－」大膳　司（RIHE）
発 表 7 「国内高等教育の国際化について」ソフィア・アコーディス（CSHE）
発 表 8 「日本の大学教授職の国際化 －研究大学と非研究大学の比較を中心に－」黄　福涛（RIHE）
発 表 9 「オーストラリア高等教育界の政策協議の現状」H･コーツ，R･ジェームズ，S･アコーディス（CSHE）
発 表 10 「国際共同学位の目的と課題」野村　朋絵（博士課程後期）
発 表 11 「大学教員の国際化と研究生産性に関する実証研究 －中国の事例を中心に－」呉　嫻（博士課程後期）
コメント：杉本　和弘（東北大学高等教育開発推進センター・准教授）
討　　論
総　　括：リチャード・ジェームズ（CSHE）丸山　文裕（RIHE）

この二日間のセミナーにおいて，日豪双方の参加者が研究発表と活発なディスカッションや意見交換などを通じて，日豪両国における高等教育が直面しているチャレンジや課題，政策的，機関的レベルにおける改革や変化の実態，そして今後の動きなどについてより深く理解できました。

また研究発表とディスカッション以外に，日豪双方の参加者は，両センター間の高等教育研究でのさらなる提携と協力を進めていく重要性も再確認しました。今後，国際セミナーの共催の継続をはじめ，大学院生の交換留学や，お互いに関心がある課題について共同研究を立ち上げることで合意しました。

第42回研究員集会報告

村澤　昌崇
（高等教育研究開発センター准教授）

今年度の研究員集会は「高等教育とグローバル化：グローバル人材養成の課題・可能性」と題して，11月26日（金）の一日にて開催されました。近年「グローバル化」は誰もが耳にする言葉として定着し，その対応が不可避であるかのような物語が組まれていますが，実際はその定義や内実，功罪についての十分な議論が高等教育の界隈でなされているのか心許ないところがあるように思います。そこで，今回は，グローバル化をめぐっての多角的な議論の必要性を発信するという趣旨のもとで，佐藤邦明氏（文部科学省），

上山隆大氏（慶應義塾大学教員），大森不二男氏（首都大学東京教員），津田幸男氏（筑波大学名誉教授），諸橋佑司氏（筑波大学職員）の6名に話題提供をお願いしました。

会合は，津田氏の鮮明な英語化不要・日本語優先論の主張に，他の講演者・話題提供者が反論するという明確な二極対立図式の様相を呈し，フロアも巻き込んで予想以上に議論は盛り上がりました。賛否に分かれての議論は明快ではありましたが，現実的な解を見いだすための落としどころをどこに見いだすのかが課題であると感じました。会の詳細は後日発刊される高等教育研究叢書をご覧いただければと存じます。

今回は週末平日の１日に凝縮しての開催という思い切った試みでありましたが，例年にない120名を越える参加者を迎えることができ，盛会のうちに集会を終えることができました。この場を借りて，ご登壇下さった講演者・論点提起者の方々，集会へご参加下さった方々，集会企画・運営を支えて下さったセンタースタッフの方々に御礼申し上げます。

外部評価について

大膳　　司
（高等教育研究開発センター教授）

平成27年2月23日，外部評価委員会を実施した。

当センターには自己点検・評価委員会が常置されており，専任教員全員が，教育部会，研究部会，社会貢献・国際交流部会の3つの部会に分かれて，各活動の点検・評価を常時実施している。この度の外部評価は，平成24年3月，本学の評議会において，第２期中期計画が修了する最終年度（平成27年）の6月までには，外部評価を行いその評価結果を反映させた次期中期計画を策定する，ということが決定されていたことに基づいて以下の通り実施された。

平成26年1月のセンター会議において，平成26年度中に外部評価を受けることを検討し，同年3月の当センター運営委員会において，来年度中に自己点検・評価報告書を作成し，外部評価を受けることが確認された。それを受けて，平成26年4月から11月にかけて，自己点検・評価委員会の委員長，副委員長，3部会の責任者（部会長）の5名を中心として，自己点検・評価報告書を作成した。

平成26年12月の運営委員会にてその自己点検・評価報告書を認定してもらい，直後に，外部評価委員に自己点検・評価報告書を送付し外部評価を依頼した。

外部評価委員には，小林雅之氏（東京大学大学総合教育研究センター教授），吉田文氏（早稲田大学教育・総合科学学術院教授），山田礼子氏（同志社大学社会学部教授）の3名を依頼した。

2月の外部評価委員会において，委員から辛口で有意義なコメントをいただいた。現在，自己点検・評価や外部評価委員会でのコメント等をふまえて，次期中期目標・中期計画策定に資するセンター改善方策を検討し始めた。外部評価の詳細は，平成27年度中に刊行される『外部評価報告書』をご覧いただきたい。

高等教育公開セミナー報告

平成26年度高等教育公開セミナー

大場　　淳
（高等教育研究開発センター准教授）

センターは，平成14年度から高等教育に関する諸問題を取り上げる高等教育公開セミナーを毎年開催している。本セミナーは，近年多く開催されている実践に焦点を当てたセミナー類とは異なって，セン

ター教員等の研究に基づいて高等教育の基礎的な知識等を提供することを目的として開講されるものである。対象は高等教育に関心のある全ての者としている。今年度は8月25～26日の両日にセミナーを開催したところ，学内外から28名の申し込みがあった（実際の参加者は23名）。今年度は，広島大学教職員のほか，関東地区を含む各地から大学・高等教育関係機関・マスコミ等からの参加者があった。

今回のセミナーでは,「グローバル化時代の高等教育」を主題として取り上げた。グローバリゼーションに対応した日本や外国の大学改革の動向，各大学の対応，直面する課題等について，センター教員・研究員が歴史・統計分析・国際比較といった様々な角度から講義を行った。セミナーのプログラムは以下の通りである。

【第1日】

講義1　大学改革の背景と課題（丸山文裕）

講義2　グローバル化と高等教育改革（藤村正司）

講義3　誰が大学改革を主導しているのか（小入羽秀敬）

講義4　グローバル化時代の中での高大接続：パブリック・スクールの役割（秦由美子）

【第2日】

講義5　グローバル化時代における大学の経営行動：国立大学の連携・統合を事例に（村澤昌崇・渡邉聡）

講義6　学士課程におけるグローバル人材養成の実態と今後の課題（黄福涛・大膳司）

講義7　大学の科学生産性の歴史的変動：グローバル時代の日本の現状を歴史的観点から再考する（島一則）

講義8　大学院における大学教員の育成を考える（佐藤万知）

講義9　フランスにおける大学間連携と統合（大場淳）

学生シンポジウム報告

シンポジウム「大学と学生」（第1回）
学生は大学改革にどう関わっていくか～学生参加の在り方を考える～

大場　　淳
（高等教育研究開発センター准教授）

高等教育が大衆化していく中，大学の在り方を考える上で学生の視線が重要であることに鑑み，平成26年12月6日，センターは「学生と大学」と題したシンポジウムを開催した。このシンポジウムは，21世紀の高等教育における学生の在り方や大学と学生の関係等について検討することを目的として企画されたものである。

第1回である今回のシンポジウムでは，大学の諸活動への学生参加を主題に取り上げた。学生参加に関する研究者や実際に大学運営等に参加している学生を招いて，講演・報告をいただいた後，活発な討論が行われた。登壇者を除く参加者は29人で，学部学生，大学院生，大学教員，大学職員など，様々な出席者があった。コメントの後の最後の討論では非常に活発な意見交換があり，学生参加の現状や課題，今後の方向性についての議論が深めることができた。

シンポジウムのプログラムは以下の通りである。

日時：（土）13時～17時30分（情報交換会終了20時）
会場：広島大学高等教育研究開発センター授業研究開発室

13:00-13:10　開会行事
13:10-14:50　講演
①井上義和（帝京大学）
②廣内大輔（岐阜大学）
14:50-15:05　休憩
15:05-16:05　学生による事例報告
①長城沙樹（筑波大学）
②居石直久（名古屋大学）
③後藤千尋（岡山大学）
④清水　綾（北海道医療大学）
16:05-16:20　コメント　林　透（山口大学）
16:20-17:20　討論
17:20-17:30　閉会行事
18:00-20:00　情報交換会

2014年度の公開研究会

＊肩書は当時のもの（敬称略）

	講　　師	テ　ー　マ
第1回（2014/4/21）	ディエップ・アン・T氏（フランス・セルジ・ポントワーズ大学国際担当・副学長）	国際流動性：政策，実践，統計～フランスの事例
第2回（2014/6/20）	張　秀萍 氏（中国・大連理工大学人文社会科学学部高等教育研究センター・教授）	中国における地域別高等教育競争力および影響要因の分析
第3回（2014/7/8）	カルロス・オルネア氏（メキシコ・首都自治大学ソチミルコ校人文社会科学部・教授）	メキシコの高等教育：動向と岐路
第4回（2014/8/4）	ドン・ヴェステルハイデン氏（オランダ・トゥウェンテ大学高等教育政策研究センター・上級研究員）	U-Multirank: オンラインを使った新しい大学ランキングと活用法
第5回（2014/8/29）	ダニエル・マッキナーニー氏（アメリカ・ユタ州立大学歴史学部・副学部長）	学問分野のチューニングに必要なディスカッションを考える
第6回（2014/10/31）	グレゴリー・プール氏（同志社大学・教授）井本由紀氏（慶應義塾大学・講師）堀口佐知子氏（テンプル大学ジャパン・准教授）	高等教育研究におけるエスノグラフィの可能性を探る
第7回（2015/1/23）	リチャード・ジェームズ氏（オーストラリア・メルボルン大学・副学長 / 教授）	国際的な大学ランキングの順位の向上：メルボルン大学の事例分析
第8回（2015/1/30）	ヘルマン・アルバレス・メンディオラ（メキシコ・先端科学研究センター教育研究部・主任研究員／カナダ・ブリティッシュ・コロンビア大学教育学部・客員教授）	メキシコ高等教育の概要：構造的特徴，発展の方向，政策，公正性に関する問題
第9回（2015/2/25）	ベルナール・ユゴニエ氏（フランス・コレージュ・デ・ベルナルダン研究部長，元OECD教育部・次長）	高等教育の卓越政策と国際化

センター往来【2014年4月～2015年3月】

＊所属は当時のもの（敬称略）

＜2014年＞

4月　張　秀萍（大連理工大学）Richard James・Hamish Coates・Sophie Arkoudis（メルボルン大学高等教育研究センター）山本　眞一（桜美林大学）杉本　和弘（東北大学）李　敏（信州大学）Diep, Hung T（セルジ・ポントワーズ大学）

5月　Rethy Kieth Chhem（国際原子力機関）Isabelle Servant（Ecoles du Monde - Acteurs en Education）

6月　坂本　孝徳（学校法人鶴学園）駒井　章治（奈良先端科学技術大学院大学）

7月　Carlos Ornelas（首都自治大学ソチミルコ校）天内　和人（徳山工業高等専門学校）斎藤　貴浩・前原　忠信・小貫　有紀子・和嶋　雄一郎（大阪大学）

8月　Don F. Westerheijden（トゥウェンテ大学）Daniel McInerney（ユタ州立大学）

9月　なし

10月　坂本　孝徳（学校法人鶴学園）内田　竜司，嶋田　香，赤坂　竜之介（福岡歯科大学）Rayburn Barton（サウスカロライナ大学）Gregory Poole（同志社大学）井本　由紀（慶應義塾大学）堀口　佐知子（テンプル大学ジャパン）

11月　高柳　妙子（帝京大学医療共通教育研究センター）第42回研究員集会招聘者［佐藤　邦明（文部科学省）上山　隆大（慶応義塾大学）大森　不二雄（首都大学東京）津田　幸男（筑波大学名誉教授）諸橋　祐二（筑波大学）森　利枝（大学評価・学位授与機構）］

12月　学生シンポジウム［井上　義和（帝京大学）廣内　大輔（岐阜大学）林　透（山口大学）長城　沙樹（筑波大学）居石　直久（名古屋大学）後藤　千尋（岡山大学）清水　綾（北海道医療大学）］

＜2015年＞

1月　施　雨丹（華南師範大学教育科学学院）Richard James（メルボルン大学）Germán Álvarez Mendiola（先端科学研究センター）

2月　Bernard Hugonnier（コレージュ・デ・ベルナルダン）清水　和彦（筑波大学）Emilda Rivers（アメリカ国立科学財団（NSF））

3月　加藤　かおり（新潟大学）勝野　喜以子（成蹊大学）井上　史子（帝京大学）立石　慎治（国立教育政策研究所）

新堀　通也先生のご逝去を悼む

「いつの日か聖賢(ひじり)の書(ふみ)を読みつくし
我の思想(おもい)を生み出さむ日は」（昭和21年秋　未知夜）

山野井　敦徳
（広島大学・くらしき作陽大学名誉教授）

2014年3月24日，第5代目センター長であられた新堀通也先生が白鳥の歌を高らかに詠いつつご逝去された。享年満92歳であった。ご葬儀は，故人のご遺志により家族葬で執り行われたという。謙虚な先生にはそれは一つの美学なのであろう。年末に風邪をこじらされて肺炎でご入院されたと伺い案じていたが，突然のご訃報に驚愕した。

先生のご業績は，広島大学と武庫川女子大学の退職時にまとめられた『新堀通也年譜』（私家版1985年）と『わが研究の軌跡－ある教育研究者の「自分史」－』（武庫川女子大学教育研究所2005年）に基づいて和洋語で出版された著書（単著・編著等），訳本（監訳・編訳・訳本等），論文（学会誌・機関雑誌等），書評，辞典，マスコミ（新聞・商業雑誌）向けなどを総計すれば1,710本以上（シリーズ物は1本と計算）に及ぶ。学界を中心に我が国内外への質的貢献はそれ以上に深淵でその全貌を言葉では容易には語り尽くせない。1987年には教育社会学の発展へのご貢献によって，紫綬褒章を受章されたのをはじめに数々の栄誉に叙せられた。

このような前人未到のご業績を残された先生とは一体どのようなお人柄なのだろうか。それを理解していただくためには【シンボリイズム】と称される基本精神を読み解く必要がある。その真髄とは何よりも学問に対する姿勢，すなわち，それに注がれる愛とその学問的野心である。それは若き学徒の時代から逝去されるまで一貫して堅持されたようだ。青年期の短歌（歌集『戦中・戦後青春賦』文芸社2006年），主任教授昇任に際して学生向けの『教育社会学研究室入門』（私家版1972年），さらには絶筆となった『新堀通也著作集』（全７巻 学術出版社2014年）に至るまで学問への志がいろいろと吐露されている。一体，このような学問へひたむきな情熱はどのようにして培われたのであろうか。科学社会学では「聖なる光」（holy fire）という内なる精神の重要性が指摘されるが，それに加えて，先生の運命的な特殊体験も影響しているかも知れない。病床（肺浸潤）に臥せって学徒出陣できなかった無念さ。悲惨かつ壊滅的な被爆体験。阪神・淡路大震災。先生の「運命論者」として「無為に生きてはならない」というある種の強迫観念に影響されたのかも知れない。こうした苦難と学問への熱情を通して，方法論としての語学，論理学，哲学的思考法と教育学思潮，教育哲学，教育学の学問論とに苦闘された様は，「新堀未知夜荘」蔵書の読書歴や青年期の学問への一連の短歌から想像するに難くはない。

先生の研究者としての目的を要約してみると次の三つにあったと思われる。①フルブライターとしての留学直後にまとめられた「ネポティズム社会学の構想」（『現代教育学の諸問題－皇至道博士還暦論文集』学研書籍1965年）で主張されるように，日本独自のネポティズム現象や身近で現場的な未開拓の研究テーマを好んで取り上げ，学閥，学生運動，進学問題，科学社会学，生涯教育，教育病理，海外の日本研究，殺し文句の研究，夜間大学院，臨床教育（教育病理）学等々，といったオリジナル研究を一貫して追究する一方，多くの弟子を育成した。②清水義弘氏と同様，デュルケーム社会学を基盤に斯学の理論的枠組みを構築し，とりわけ日本独自の教育社会学的研究とその威信を国際レベルにまでに高めて不動のものにすることに意を注がれた。日本的現象としての「学生運動」研究に代表される如く，そのユニークな成果は世界の学問の中心地，アメリカの社会学会誌（*Sociology of Education*, 1963）や高等教育誌（*Higher Education*, 1980）等に採択され，D. リースマン，S. M. リップセットや P. G. アルトバックらと交流して国際会議等で世界の学生運動研究をリードした（*Daedalus*, 1968, *Annals*, 1971）。それと同時に，学会活動では，日本の教育社会学の動向と課題を明らかにする一方（代表的には『教育社会学研究』17集1962年），我が国を代表する教育社会学者として，世界と各国の教育社会学の動向とあり

方について編纂した（UNESCO　Institue for Education, *International Review of Education, Special Number*, 1972）。本書は主だった国々の母国語に翻訳され，国際的に高く評価された。③先生ご自身は研究者並びに文科省社会教育官として，永井道雄氏とともに我が国に生涯教育を導入した最大の貢献者のお一人であったが，生涯現役を自らに課せられてきた。第一論文とも言うべき「ルソー教育思想の研究」（広島文理科大学教育学科卒業論文1945年。これはその後「ルソー教育学序説」日本教育学会『教育学論集』1949年に発展）から現在まで，およそ70年間の研究生活を通じて，ルソー教育，特殊教育，教育社会学，デュルケーム社会学，生涯教育学習，臨床教育学，マスコミ界等のリーダーとして活躍した。最近は新聞や雑誌のジャーナリズムを介して教育界のご意見番として日本社会に忌憚なくモノ申してこられ，最後には生涯学習としての臨終教育学の必要性まで提唱して去られた。

こうした各界における先生のご活躍の中で大学・高等教育等に関する一連のご研究はもっとも輝かしい最高峰を形成するものであって，その幾つかの代表的成果を通じてセンターとも深く関係してこられた。

最初に，センター創設のきっかけの一つとなったのは第3回大学史研究会（宮島ロッジ1969年12月）であったが，サロン的役割を果たしていたこの研究会には，新堀・横尾・中山・寺崎の各先生が参加され，当方も末席に加わった。ここでの先生のご発表は『大学論集』の第1集に「アカデミック・プロダクティビティの研究」として出版。この論文は，科学社会学に関する研究室初の共同研究で，そこで採用された Citation Analysis 法はわが国で初めてだろう。その集大成は『科学社会学の研究』（『大学研究ノート』49号1981年）として出版後，『学問の社会学』（有信堂1984年）として再編集された。その後，先生を編著とする『外国大学における日本研究』（同上60号1985年）や「エポニミー研究序説－科学社会学の試み－」（『大学論集』13集1984年）などもセンターの研究に彩りを添えた。

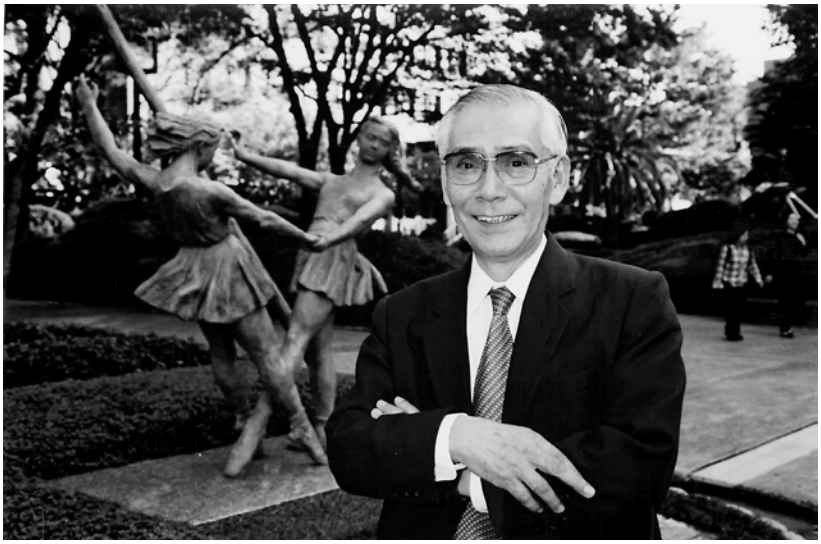
一方，センターも機会あるごとに研究員集会等に先生のご登壇を依頼している。大学構造改革期において，当時，全国の大学改革のリード役であったセンターにとって大学評価制度の導入が焦眉の急であった。先生はシンポの司会者として我が国の（ネポティズム的学閥文化に支配された）大学社会では評価行為自体が甚だ困難で疑問視されたことを記憶している（1989年度第18回研究員集会「大学評価－その必要性と可能性－」）。大学評価制度が体系的に法制化された現在でもなお真の意味での評価文化が定着しているとは言い難い。先生の警鐘は今なお生きており，さらなる改革が要請されるだろう。

先生は創設時の初代運営委員メンバーであり，ご定年前には例外的任期で第5代のセンター長（1984年2月1日－1985年3月31日）に推挙されたが，上記のようなご功績に対するセンターの栄誉的な対応であったと推察している。その任期中の第13回研究員集会テーマは「新制大学の35年－その功罪を考える－」（詳細は『大学研究ノート』63号1985年）という戦後の大学制度に関する総括的なものであった。

以上，先生のご業績の骨子と思い出の一端に触れた。さらなる詳細については幸いにも先生の謦咳に接した弟子たちの手になる追悼集『新堀通也　その仕事』（東信堂）が出版（4月30日）された。その紹介をもって閣筆としたい。

末筆になりますが，本当に永い間，お疲れ様でした。そしてお世話になりました。謹んで先生のご冥福をお祈り申し上げます。

合掌



【注】
お写真は，ご長女のるみ子お嬢様からご提供をいただいたものです。厚くお礼申し上げます。

新任者・離任者・就職者から一言

2015年度客員研究員

斎藤　貴浩（さいとう　たかひろ）
大阪大学未来戦略機構准教授

客員研究員としてお声がけをいただき，まことにありがとうございます。私は自らの専門を「教育事業評価」と呼び，教育に関する事業をいかに効果的に把握し，評価し，そして利害関係者に説明するかという問題に取り組んでいます。今は所属大学でIR組織を立ち上げ,「研究大学における学生経験調査」などを行い，大学の効果的マネジメントをデータの面から支援しようとしております。前職では大学評価に携わり，その過程で高等教育を専門とする先生方から多くのことを教わりました。その先生方のほとんどがこのセンターと関わりがある先生だったことからも,責任の重さをあらためて感じております。高等教育セクター全体にわずかでも貢献ができればと存じます。よろしくお願いいたします。

芝田　政之（しばた　まさゆき）
九州大学理事・事務局長

この度は客員研究員に任命していただき，大変感謝しております。丸山先生，島先生，大場先生を始め以前よりご指導いただいている多くの先生方と交流する機会ができ喜んでおります。

日々の業務を通じて，国立大学法人化及びその後10年間に導入された諸施策の成果に関するより本格的かつ学術的な評価の必要性を痛感しております。

「The devil is often in the details.」と申します。法人化の理念が歪められるような運営がなされていないのか？ここ10年間の施策は，法人化の理念･メリットを浸食していないか？これらは総体として教育研究成果にどのような影響を及ぼしているか？先生方と議論できる機会を楽しみにしております。

中澤　渉（なかざわ　わたる）
大阪大学大学院人間科学研究科准教授

このたびは，貴センターの客員研究員としての機会をいただき，ありがとうございます。私はかつて教育と選抜，最近は社会階層・労働市場と教育の問題を，主として大規模サンプルを利用した計量分析によって研究を進めています。また，特にパネル調査の分析手法など,計量分析の方法論にも関心をもっております。そうした私のテーマからは若干ずれていたのですが，昨年勁草書房から上梓した『なぜ日本の公教育費は少ないのか』が，思いがけずサントリー学芸賞を受賞することになり，高等教育費の問題について考え，発言する機会も増えました。折角いただいた機会ですので，そうしたテーマをより深めていければと考えております。よろしくお願いいたします。

原田　健太郎（はらだ　けんたろう）
関西大学教育推進部特別任用助教

この度は客員研究員の機会を与えていただきありがとうございます。

現在は関西大学においてIRの一環としての学生調査を初めとする各種調査を行っております。IRという業務では，当然のことながら研究力が必要ですが，一方で実際の大学改革や学修支援に資するという点で実践力も必要とされます。このように，研究と実践の統合が必要とされています。

上記の課題に対して，高等教育研究開発センターから多くのことを学びつつ，微力ではございますが，センターにも貢献できればと考えております。どうぞよろしくお願いします。

廣内　大輔（ひろうち　だいすけ）
岐阜大学教育推進・学生支援機構准教授

この度，伝統ある広島大学高等教育研究開発センターの客員研究員を拝命し，身が引き締まる思いです。

私は岐阜大学にて，アクティブラーニング科目の企画開発やTA・SA養成を含む学習支援，さらにはCOC事業など，いわば大学改革の前線で働いています。一方で，こうした流行の“改革”がRIHE本流の高等教育論から見てどう映るのか，興味が尽きません。前線から見える風景とRIHEでのアカデミックな研究活動とを往還しながら，思索を深めていくことを今後の課題にしたいと考えています。

全国的に多くの「大教センター等」が実務志向にシフトする今，益々RIHEの存在意義は大きくなると期待しており，そこに少しでも貢献できるよう尽力する所存です。どうぞよろしくお願い致します。

2015年度学内研究員

井出　太郎（いで　たろう）

学術・社会産学連携室教授／学長特命補佐（大学経営担当）

昨年4月に文部科学省から広島大学に着任し，その後高等教育研究開発センターの学内研究員に加えていただきました。広島は故郷であり，また中学・高校は広島大学附属に通っていたことから，縁の深さを感じています。大学では工学を専攻（メガフロートに関する研究）していたこともあり，文部科学省では主に研究開発政策や国際政策に携わってきました。自分の興味もそうした分野にあることから，このたび初めて大学に赴任し，国の中核的な研究基盤である国立大学の運営や高等教育研究に携わることが出来てうれしく思っています。この機会を利用して激動期にある国立大学の現状を学び視野を拡げ，また出来る限り広島大学及びセンターに貢献することができればと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

河野　修興（こうの　のぶおき）

大学院医歯薬保健学研究院（医）分子内科学教授

昭和53年広島大学医学部医学科を卒業。内科の臨床医として37年が経ちました。大学院医学系研究科時代から研究を開始，また，医学科教育に携わって25年が経ち，平成18～22年度の4年間は医学部長として医学部教育の改善に力を注ぎました。

医学は応用科学に分類されることが通常ですが，診療・臨床医学は「選別・一般化された知識の単純応用～応用科学」，研究は「応用科学～基礎科学」，教育は「いわゆる教育～訓練」から成り立っています。単なる基幹病院や研究所と異なり，大学の医学部・附属病院・研究室では，研究者が診療し，研究者が教育することが強みです。学内研究員として貴センターの活動を拝見することにより今後に役立てたいと思っています。

西嶋　渉（にしじま　わたる）

環境安全センター教授／研究企画担当副理事

大学の教育研究活動を円滑に進めるためには様々なサポート機能・組織が必要となります。私の所属する環境安全センターもその一つですが，最近リサーチ･アドミニストレーター（URA）という職種が注目されています。広島大学でも研究大学強化促進事業に採択されたことを期にURAを配置しましたが，これまでの研究支援を超える研究マネジメント力が期待されるURAの能力開発は大きな課題です。URAの育成プログラムの作成と運営に高等教育研究開発センターの貢献が期待されているところですが，私も微力ながらURAの能力開発に貢献したいと考えていますのでよろしくお願いいたします。

西谷　元（にしたに　はじめ）

大学院社会科学研究科教授／副学長(国際担当)

今からさかのぼること35年ほど前，「昭和時代」に，当時在学していた本学大学院の法学研究科より，交換留学生としてオークランド大学へ留学したのが，海外の高等教育機関とのファーストコンタクトになります。それ以来，欧州，米国のいくつかの大学での留学・交換教授をへて，昨年よりSGUを含む様々な国際プログラムを推進する職に当たることになりました。

学生・教員の立場から離れて，企画・管理へと立場は変わってきていますが，初めて異なる高等教育に接した時の興奮は今でもはっきりと覚えています。高等教育の専門家ではありませんが，実践を行ってきた経験が少しでもお役に立てればと思っております。

三須　敏行（みす　としゆき）

グローバルキャリアデザインセンター教授

このたび，貴センターの学内研究員として参画する機会をいただき，非常に楽しみにしております。私はこれまで，文部科学省科学技術･学術研究所，OECDにおきまして，博士課程修了者やポスドク等の進路動向，雇用状況，意識等に係る調査研究を行ってきました。その際，第3期科学技術基本計画のフォローアップの一環として，貴センターの方々と共同で日米大学院教育の比較調査も実施しました。昨年4月からは，本学グローバルキャリアデザインセンターの教員として現場レベルに移り，博士人材の養成やキャリア開発の観点から必要な取組を実施すべく努力しております。今後とも貴センターと連携しながら，様々な課題の克服に努める所存です。

2015年度新任職員

藤原　亜希（ふじわら　あき）
学術支援グループ契約一般職員
（2015年4月着任）

平成27年4月1日から事務を担当させていただく，藤原でございます。

昨年度は，霞地区運営支援部研究支援グループで研究協力事務担当として，遺伝子組換え生物等使用実験計画書，各種団体が公募する研究助成申請書，Material Transfer Agreement など，多岐にわたる書類を点検，決裁のうえ，担当部署や学外機関等へ提出する日々を過ごしておりました。

今回，広島大学の研究を代表する高等教育研究開発センターに係る担当を申しつかり，とても光栄に感じております。初めての業務でいろいろ行き届かないことがあると思われますが，皆様にご指導いただき，立派に役目が務まりますと幸甚です。

併せて，持前の元気さを発揮できれば幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。

2014年度離任者

小迫　由美子（こさこ　ゆみこ）
2015年3月末退職

センターにはH18年8月よりお世話になり，3月で定年を迎えました。

まさか定年まで勤めるとは考えてもいませんでしたが，いろいろな方に支えられて何とか卒業することができました。

4月からは，センターから近い理学研究科支援室でお世話になることになりましたので，今後とも引き続きご指導いただきますよう宜しくお願いいたします。

長い間本当にありがとうございました。

就　職　者

西村　君平（にしむら　くんぺい）
弘前大学 COC 推進室助教

この度，弘前大学 COC 推進室の助教へ就任することになり，センターから遠く離れた青森の地に赴くことになりました。とはいえ，まだ博士論文を書き上げていないため，あと半年程センターに籍を置かせて頂きます。

センターの一員としての年月を振り返ってみると，つくづく痛感することがございます。それは私がいかにも不出来な学生であったことです。センターの先生方，職員の皆様，院生の皆様には，様々なご心配・ご苦労をお掛けいたしました。とりわけ，修士時代から一貫して私の研究指導を続けてくださっている島先生には多大なるご尽力を頂きました。この場を借りて御礼申し上げます。

皆様の御恩に報いるためにも，これから博士論文をしっかりと書き上げると共に，弘前大学の発展に少しでも資することができるよう，微力を尽くしていく所存です。今後ともご指導頂ければと存じます。

修　了　生

大林　小織（おおばやし　さおり）
博士課程前期修了（2014年9月）

この度，無事博士課程前期を修了いたしました。

社会人学生として仕事と学業とのバランスをうまくとることができず途中休学するなど先生方にはご心配をおかけいたしましたが，最後まで暖かくご指導いただきました指導教員の秦由美子先生を始め，先生方，並びにご支援くださいました職員，院生の方々に深く感謝申し上げます。

さまざまな角度からの高等教育の研究が行われている RIHE で多くのことを学ばせていただきました。そのような環境で大学職員として現場で直面する課題を取り上げ，研究できたことにより，職務に対してこれまでとは異なるアプローチを試みるようになっています。今後も RIHE で得られた学びを生かして，高等教育の実務に精進して参りたいと思います。

伊藤　俊（いとう　すぐる）
博士課程前期修了（2015年3月）

RIHE へ入学してから早2年，この2年間はこれまでの人生で一番に迷い，悩み，考えた時期であったと感じております。こと修士論文に関しては，疑心が暗鬼を生み，少しの自信をも持つ難しさを痛感しました。何を以て研究と呼べるのか，良い研究とは何か，自分は何がしたいのか，目標達成に向けて何をすべきか・・・，自問自答の毎日でした。

そのようなこともあり，今の私には修了に際しての嬉しさや達成感なるものはありません。やる

こと・やりたいことは山積しております。多少なりとも苦しんだRIHEでの貴重な経験を糧に，更に自分を磨き，意味あることを為し，より社会への貢献が出来ますよう，お世話になった全ての方々に活躍をお誓いして，修了者からの一言とさせて頂きます。

新　入　生

＜2014年4月入学者＞

謝　妍笑（しゃ　けんしょう）
博士課程前期入学（2014年4月）

2014年4月より，博士課程前期課程に進学しました。RIHEの方々から，学問のことだけではなく，生活の面で色々と助けていただきました。毎日新たな知識を学び，刺激的な生活でした。また，センターで，様々なイベントを行い，たくさんの視点に触れ，自分が足りないところがたくさんあるという事実を反省することになりました。物知らずな私に対して，丁寧に指導をしてくださった先生方，先輩方には，心から感謝しております。

2015年4月からは博士課程前期課程2年になっております。中国における大学入学者選抜試験の改革について研究したいと思います。これから精一杯に頑張っていきます。今後とも，どうぞ宜しくお願い申し上げます。

朱　映雪（しゅ　えいせつ）
博士課程前期入学（2014年4月）

光陰矢の如く，2014年4月博士課程前期に入学してから1年が経ちました。先生方をはじめ，RIHEの方々からさまざまな刺激を受けて，知識の習得はもちろんのこと，物事への見方や考え方も変わりつつありましたので，私にとってはとても有意義な一年間でした。

もともと教育学を学んでいない私に熱心なご指導と留学生であることへのご配慮をしてくださる先生方や職員方にこの場を借りてお礼を申し上げたいと思います。これからの一年間も頑張って研究をし続けていきたいと思いますので，どうぞよろしくお願いいたします。

宮田　弘一（みやた　ひろかず）
博士課程前期入学（2014年4月）

社会人入学の宮田弘一と申します。所属ゼミは，村澤ゼミと決まりました。広島大学大学院では，現在，大学内で盛んに行われているキャリア支援やキャリア教育を批判的に検証したく，入学いたしました。

また，職場は尾道市立大学です。主な職務は総務関係（給与等）や科研費に関するものです。大学院では，研究だけでなく広島大学を始めとする他大学の方との情報交換を行い，職場に還元できたらと考えております。

趣味はジョギングで，今年2月にフルマラソンを完走しました。次回は4時間を切れるよう，トレーニングを続けております。研究の合間に，広島大学の構内を走るのを楽しみにしています。どうぞ，よろしくお願いいたします。

＜2015年4月入学者＞

佐々木　宏（ささき　ひろし）
博士課程前期入学（2015年4月）

社会人大学院生の佐々木です。これから2年間，よろしくお願いします。大学卒業後は，都内の総合広告代理店に勤務したのち，独立自営，通信制高校のコーチ，首都大学東京の特任教員の経歴を経て入学する運びとなりました。51の手習いです。研究テーマは，グローバル教育とグローバル入試です。旬なテーマではありますが，先行研究が少ないので，指導教官のご助言をいただきながら，この分野の研究を深めてまいりたいと思います。これまで伊達に歳を重ねてきたわけではないので，私でなにかみなさまに協力できることがあれば，積極的に関わってまいりたいと思いますので，お声がけいただければ幸いです。何卒宜しくお願い申し上げます。

鶴　健太郎（つる　けんたろう）
博士課程前期入学（2015年4月）

高等教育開発専攻修士1年鶴と申します。私は大学時代まで経営学を専攻しておりました。しかし，高等教育に興味を持ち始めこの広島大学高等教育研究開発センターに入学しました。きっかけは，現在世の中はグローバル化しており，大学での勉強，経験など高等教育が重要な役割を占めているから

ではないかと感じたからです。また，大学全入時代と言われている今，それぞれの大学が何をすべきなのか，どのようなことができるか。ここでは素晴らしい先生方や施設，資料などが取り揃えてあります。この素晴らしい環境を生かし，今後，勉強や研究に邁進していきたいと思います。これからよろしくお願い致します。

辺　雅茹（へん　がじょ）
博士課程前期入学（2015年4月）

こんにちは。辺雅茹と申します。今年は22歳です。中国の河南省洛陽市出身です。現在はRIHEのM1です。

2014年10月から半年の研究生をやりました。RIHEの方々から，多方面にわたり援助していただき，多くの知識を学ぶことができました。心より感謝を申し上げます。また，RIHEでの勉強・研究の中で，高等教育に関して様々な知識に触れ，多くの貴重な経験を積み重ねました。先生方，先輩方のご愛顧ご指導のお蔭をもちまして，著しい進歩を遂げることができました。心から感謝の意を申し上げます。

これから，留学生の奨学金及び留学効果について研究したいと思います。これからも引き続き努力しようと思います。今後とも，どうぞよろしくお願いいたします。

松宮　慎治（まつみや　しんじ）
博士課程前期入学（2015年4月）

2015年4月からお世話になる松宮と申します。神戸の私立大学で職員をしております。大学職員としての勤務も8年目を迎える中で，職業人としてのブレイクスルーを目指して受験を決めました。無事合格をいただきましたが，それはあくまでも社会人としての時間の蓄積を評価いただいた結果に過ぎず，大学院での研究に従事するには基礎的な力が不足していると自戒しております。勤務しながらの通学には不安も大きいですが，限定された条件下でどこまでやれるのだろうという楽しみもあります。少し厳しめにご指導いただければ幸いです。今後ともよろしくお願いいたします。

研　究　生

于　洋（う　よう）
（2015年4月入学）

このたび，研究生としてRIHEで勉強する機会を与えていただき，本当にありがとうございます。期待と不安でいっぱいですけど，RIHEでの勉強を通して，高等教育に関わる様々な知識を学び，自分の足りないところを補充し，自分の視野を広げることが期待しています。自分の能力を最大限に伸ばすために，ぜひ一生懸命頑張ります。また，もの知らずの私に対して，根気強く，丁寧に指導をしてくださった先生方，先輩方には，いくら感謝をしても足りません。今後ともご指導・ご鞭撻のほどどうぞよろしくお願い申し上げます。

王　嘉（おう　か）
（2015年4月入学）

2015年4月から大学院生を目指す研究生としてRIHEで勉強させていただくことが決まりました。柔らかな風に顔をなでられ，生命が生き生きと活動を始め，春の訪れを告げる桜も咲き誇る4月に，私は広島に来ます。このRIHEに入ることの喜びをしみじみ感じています。

私にとって，この時期は人生の新しいスタートです。これから，人生を充実するために，意義ある留学生活を送り，自分の目標の達成に向けて日々努力して，博士課程前期に進学できるように一生懸命頑張ってまいります。世界各国から集まってきた仲間と共に，勉強しながら成長していきたいと思います。センター長ならびに諸先生方，そして先輩方にはあたたかいご指導とお導きのほどよろしくお願い申し上げます。

方　世良（ほう　せいりょう）
（2015年4月入学）

留学生の方と申します。この4月より，研究生として一年間RIHEで学ばせていただくことになります。高等教育研究の先端をゆくこの素晴らしい環境で勉強できることは光栄に思っております。これからの一年間は分からないことと不安がいっぱいあると思いますが，勉学と研究に対して，また自分自身の修身に対してもより一層努力をしていこうと考えております。これから何卒ご指導及びご鞭撻くださいますようお願い申し上げます。

院生だより

野村　朋絵
（博士課程後期）

フランス政府給費留学生として，2014年9月より，パリに滞在をしています。こちらでの所属大学は，Paris-Est Créteil Val de Marne 大学で，大学院での授業だけでなく，毎月行われる学生と教員による研究発表の場や，研究者を対象としたフランス語講座，College de France での講義の聴講など，様々な刺激を受けています。また，今年の2月からは，UNESCO パリ本部の教育部でインターンの機会をいただきました。これらの充実した環境の中で，私が特に学生として恩恵を受けているのが，国際学生都市（Cité Internationale Universitaire de Paris）の存在です。

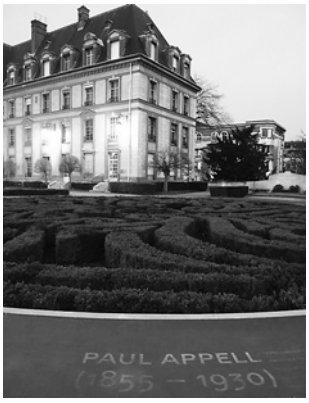
国際学生都市はパリの南端に位置し，パリの大学に在籍する学生や研究者のための寮が集まっています。広大な敷地に，ギリシャ館，チュニジア館，日本館，ブラジル館等，各国から集まった学生のための40の寮と，図書館や食堂，劇場や体育館，銀行や郵便局といった環境が整えられています。

国際学生都市の歴史は，1925年に遡ります。二つの世界大戦の間に生まれた平和の希求から，「夢から現実へ」，「平和のため，人々が関わりあう学校」という理想に共感した人たちの寄付金によって創設されました。以来，世界中の学生，研究者，芸術家を受け入れ，毎年約1万二千人が入居者の間で，絆を築くことに貢献してきました。

出発前，私は自分が日本館に住むものだとばかり思っていたのですが，振り分けられたのは，ドイツの「ハインリッヒ・ハイネ館」。各寮の間には学生の交換制度があるため，ドイツ館に住むドイツ人の割合は入居者の約半分で，残りの半分は，他の館から私のように交換制度で振り分けられた学生や，自国の寮がない学生です。たとえば私の隣人は，物理の博士課程に在籍するギリシャ人学生に，映画を専門にするフランス人，モロッコ出身の建築家の卵，ドイツ人では，フランス文学を専門にする学生やビオラ奏者など，様々な国籍の，様々な専攻の学生です。

この出身も専攻も，所属大学も異なる学生16人が，生活空間を共有するので，食事の時間や廊下では，毎日熱い議論が繰り広げられています。日常生活の情報交換から，文化や政治の話，世界の情勢から自分たちの将来について，各学生が，母国語ではないフランス語や英語で試行錯誤しながら，意見を主張するのが印象的です。そして，意見が対立しても，若い学生が毎日顔を合わせることで信頼関係が築かれていくのを目にし，「夢から現実へ」と唱え続けた創設者の理想を垣間見る思いです。

Du rêve à la réalité



パリ国際学生都市

ブラジル館

ハインリッヒ．ハイネ館（ドイツ館）

スウェーデン館

スイス館

情報調査室だより

今回は，情報調査室にある**【広島大学に関する資料】**を紹介いたします。
これらの資料は，それぞれコーナーを設け，閲覧がしやすいように工夫されています。

・広島大学大学史

大学史，高等師範学校史，旧制高等学校史，
師範学校史，その他中等高等学校史類を
収集しています。

・広島大学自己点検・自己評価

各学部・大学院・研究所・施設の自己点検評価書，
外部評価，教員活動報告書等々を収集しています。
現在の資料点数は約250点です。

・広島大学学生便覧

学生便覧，シラバス等が1955年から2014年まで
4,000点近く網羅され収集されています。

・その他

上記以外の資料（教育関係の紀要類なども）
も400点あまりあります。

上記資料の中で，毎年刊行されるものについては，各部局と連携をとり自動的に集まるようにしており，集まった資料については，検索サイトの「文献情報総合検索」で検索できます。

ぜひ，ご関心のある方は，情報調査室に足を運ばれて広島大学の資料にふれてみてはいかがでしょうか？